



謙澄を巡る人々

題字
棚田看山

その4

伊藤博文は、末松謙澄にとつて義父にあらた。その出会いは、謙澄19歳の時に日報社社長の福地桜痴ふかちさかぢに紹介されたことである。伊藤は以前より謙澄が書いた論説を「一体誰が書いているのだらう。」ととても気に入っていたので、目の前にいる青年が書いていると知った時の驚きは、尋常ではなかつたであろう。謙澄を気に入つたとみえて、翌年には伊藤の引きで正院御用掛せいゐんごんこうかとなり、黒田清隆に随行して朝鮮に渡つて日朝修好条約の起草に加わつている。伊藤は謙澄の計り知れない才能に真つ先に気づき、自分の下でこの才能を引き出そうと考えたに違いない。

謙澄の方も伊藤の期待に応えようとしていたのである。22歳の時に携わつたとされる西南戦争における降伏勧告文は、西郷隆盛に目決を促し、最悪の状況を免れた名文とされている。才能を見抜いた伊藤博文も優れた人物であるが、それに応えた謙澄も優れた才能の持ち主であつたことは間違いない。

伊藤博文・生子 親子

～運命の出会い～

女をもうけているが、謙澄は春彦と澤子さわこの二人を養子、養女している。問題なのは子どもの数ではなく、女性への考え方の違いである。伊藤は明治天皇からも「もう少し女性に対して控えたらどうか」と注意されるほど女性関係が頻繁であつたとされている。娘婿の謙澄は反対に妻の生子いくこと仲むつまじい。自筆の色紙に謙澄は「相生の色もかはらぬ老松の齡や君か命なるらむ」、生子は「松か枝もきみのよはひを喜びてらしいでて色まさるらむ」と詠み合うほど仲が良い。

生子は、謙澄没後に謙澄は煙草を離さず、はかまや畳に煙草で焦した後が絶えなかつたと笑顔で懐かしそうに話している。伊藤の後妻の梅子は、女性関係は見て見ぬふりをしていたという。伊藤は謙澄の才能に惚れていただけではなく、生真面目なところにも好意をもっていたのかも知れない。当初は謙澄を養子にしたかつたが、謙澄が断つたという話もある。生真面目だったからこそ次女の生子を嫁がせたのかもしれない。

謙澄と出会つた伊藤も幸運であつたが、自身の才能を見抜き、性格をも見抜く伊藤と出会つた謙澄もまた幸運だつたと言えよう。

(文化人末松謙澄を考える会 宇野慎敏)



末松謙澄と生子夫妻

ただ伊藤博文と末松謙澄との大きな違いは、女性との関係である。伊藤は三男三